

日美子の 完全犯罪

斎藤 栄



中公文庫



中公文庫

ひ み こ かん ぜん はん ざい
日美子の完全犯罪

定価はカバーに表示してあります。

1997年11月 3 日印刷

1997年11月18日発行

著 者 さいとう さかえ
齋藤 栄

発行者 笠松 巖

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Sakae Saito

本文・カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 小泉製本

ISBN4-12-202996-1 C1193

Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

日美子の完全犯罪

斎藤 栄

中央公論社

目次

第一章	第二章	第三章	第四章	第五章	第六章	第七章	第八章
發端	要	仇敵	脫出	番號	容疑	証人	悲劇

7	31	56	81	106	132	157	187
---	----	----	----	-----	-----	-----	-----

解 說	終 章 告 白	第 十 一 章 對 決	第 十 章 疑 惑	第 九 章 香 水
影 山 莊 一				
307	283	258	233	208

日美子の完全犯罪

第一章 発端

1

鎌倉署の敏腕警部、二階堂^{にかいどう}は、何か大きな事件がひとつ片付くと、決してその後、妻の日美子と共に、材木座^{さいもくざ}の海岸を散歩する習慣にしていた。

六月二十七日の夜は、梅雨^{つゆ}空で、いかにもしとしとと雨が降ってくるような空模様だった。

沖縄は、昨日、梅雨あけ宣言をしたというニュースが流れたが、まだ、関東地方は少しもスツキリしなかったのである。

「いやあ……今夜は、いくらかガスっているな。足許^{あしもと}もよく見えない」

そんな風^{ふう}に言いながら、二階堂は海岸の水際線までおりていった。

「なんとなく不気味な夜ね。私、時々、思うんだけど、このいつも馴染みのある海も、ある時、不意に他処他処しくなるのよ。不思議だわ」

後ろからついて来た日美子も、感慨深そうに言った。

日美子は、占術者だし、魔女の心得もある。そんな彼女が、そう言うのは、それだけ海の大きさ、妖しさをを感じるからだろう。

「不思議だよ、まったく……」

二階堂は、暗い夜の海を、じっと沖の方に顔を向けて言った。

「あなた。あの事件のことを考えているんでしょう？」

日美子が訊いた。

解決した銀行強盗事件のことである。それは、鎌倉銀行大町支店おおまちに押し入った三十歳の拳銃を持った男が、来店中の女性客を人質にして現金一千万円を強奪したのである。

たまたま、そばを通りかかったのが、二階堂と部下の若い刑事、井川義夫だった。二人とも私服だった。

二階堂は井川と共に、混乱している店内へはいった。

「みんな……床ゆかに腹這いになるか、壁の方を向いて手をあげてろ」

と、ストックキングで覆面した拳銃男は、苛立いらだった声で叫び、右手に拳銃を持ち、左手に

現金の袋をつかみながら、それで人質の女性客を前面に押し出すようにした。

このとき、店内にはいった井川は、床に腹這いになった。二階堂は一瞬、遅れて入口の壁に向かって立ち、犯人の動きを観察した。

強盗犯人は、二つある出入口の、二階堂と反対側の方から出ようとしていた。そこに逃走用のバイクが置いてあったのだ。

井川は、ちょっと顔をあげて、二階堂の方を見た。犯人は井川の躰からだから数センチのところに通り過ぎようとしていた。

「や、つていいですか？」

そんな風に訊いたと、二階堂は思った。こんなときは、人質の生命が第一だ。そう信じているから、二階堂は、

「ダメだ……」

というつもりで、目で合図した。

が、それをどう勘違かんちがいしたのか、井川は猛然と飛び起き、犯人の拳銃の手をつかんだ。轟音と共に銃弾は発射され、井川の靴に命中した。

「へしまった!!……」

そう思ったが二階堂も、こうなっては、飛びかかるより仕方がない。さいわい、二対一

の格闘となつて、犯人はその場で取り押えることができた。

2

日美子に訊かれると、二階堂は、

「ああ、そうだよ」

と答えた。

「でも、よかったわね。井川さんの傷がたいしたことがなくて……。もう、お元気なんですよ？」

井川刑事は、よく二階堂の家へ遊びに来る。独身で二十五歳という若さだが、それだけに一本気の男だ。

彼は、水晶クリスタル・ゲージング占いというものに関心を持っていて、公休日には、日美子にそれを習いたいと言つては、時々、訪ねて来ていた。

「うん。足の親指のところを、銃弾たまがかすめただけだから……」
と、二階堂は言った。

「本当に、そのくらいでよかったわ。奇蹟みたいなものね。至近距離で撃たれたんでしょ

う。下手をすれば即死だったかもね……。あなたのお父さまのように……」

日美子はホッとしたような言い方をした。二階堂の父親も、部長刑事のとき、凶悪犯人の銃弾を浴びて仆たおれているのだ。それを彼女は思い出したのである。

「……そんなことになったら、おれはあいつに申しわけないよ」

と、二階堂は、なおも、暗い沖の方を見ながら言った。

「あの人、能力があるんですものねえ」

「おまえのところに、習いに来ているんだろう？……占術を……」

「ええ、クリスタル・ゲージング……」

「変ったところもあるんだな」

「事件以来、まだ、いらっしゃってないわ」

「そうか」

と、二階堂は言った。

「公傷休暇中なんですか？」

「そうだよ」

「でも、あの事件、人質になった赤羽さんという主婦ひとの女、可哀そうだったわ」

と、日美子は言った。

「うむ」

警部は頷いた。
うなず

「あのときのショックで、流産なさったんですもの」

日美子も、流産の経験はある。それが女性にとって、どんなに哀しいことか、彼女はよく知っていた。

「おまえ、見舞に行つたと言つていたね」

「ええ。お気持がよく分かるから……。流産になった責任は、犯人にあるんでしょうけど、その責任は、とってもらえないわけでしょうね」

「犯人にか？」

「そうよ」

「そりゃ……。多分、ダメだろうな。可哀そうだけど……」

「ご主人は、とても怒っていらっしやったわ。こんな莫迦ばかなことってあるものかと……」

「無理もないが……。あの人のご主人は……。確か、プロ野球の選手だったな。スネークスの外野手で……」

「今は二軍落ちしているらしいけど……。だから、一層、苛々いらいらなさるみたいね」

「まあ……。ああいう事件は、交通事故みたいな、めぐり合わせのところもあるから……」

あの主婦も、運が悪いと思うよ」

「流産させられて、運が悪いではすまないわ」

と、日美子は怒ったように言った。

「すまないと言っても……世の中には、どうにもならないものはあるさ」

二階堂はそう言うのと、ゆっくり、水際線を歩き始めた。夜目よめにも、白い波打際の動きが見えている。

彼は何事かを考えながら、足を少し早めた。その後ろから、日美子は、赤羽外野手の妻の口惜しそうな顔を思い浮べつつ、小走りに追いかけていた。

3

翌日も曇り日だった。

二階堂は、午前七時に、

「行つて来るよ」

と言うと、黒い愛用のカバンを持って出かけた。その中には、三回分の下着を押し詰めていたので、当分、帰宅しないつもりなのを、日美子は知った。

どんな仕事が彼を待っているのか、二階堂も喋らないし、日美子もあえて訊く習慣を持たなかった。

警部が出て行った後、しばらくして、日美子は、久しぶりに、車で藤沢まで買い物に出かけようと思った。

丸十デパートの藤沢店で、花器かきの特売があるというDMを、先日、見たのを憶おほえていた。丸十藤沢店のカードを、日美子は持っているし、その外商には、顔見知りの店員がいて、うまくすると、一割から一割五分引きのサービスを受けられるはずだった。

生花いけばなの好きな日美子は、涼しげな花器が、どうしてもひとつ欲しかった。以前から、よく使っていた父の愛好した品に、とうとうヒビがはいったので、この出費はやむをえないことなのだ。

日美子は、自家用のN社製中型車、愛称ポンを運転して藤沢へ出かけた。このへポンは、ポンコツのポンである。

目ざすデパートの展示会場へ行くと、そこには、さまざまのタイプの花器が並んでいた。クラシックな焼きものの花瓶。あるいは、超モダンなガラスの器。

極端に保守的なタイプから、極端にシュールなものが、雑多に置かれているのは、実に壯観でさえあった。

そうした展示即売品を、日美子は、ひとつひとつ、時間をかけて、丁寧に見ながら選んだ。

一時間もかけて、日美子を買ったのは、クリスタルの美しい花器だった。それを外商担当者に話して、なんと二割引させたのは、日美子の腕……いや、目の力であった。

普段、日美子は、自分の催眠術の力を、そんなことには、滅多に使わないのだが、そのクリスタル花器が一万五千円もしたので、ちょっと目の力を使ったのだ。

「あなたは……これを二割引しなければならぬ……」

この暗示によって、担当の若い男は、

「結構ですよ。二割お引きしましょう」

と言った。

花器類は、せいぜい一割引がサービスの限界だというから、これは日美子の術の力である。もっとも、彼女は、五割引にもさせられる自信はあったが、そうしないだけのエチケットは心得ていたのだ。

そのクリスタル花器は、工芸品とされていて、〈夏の詩〉という作品名もついている品で、作者は、四十歳の青木紫明という人物である。

「へい品物を、安く手に入れたわ……」